

# ART ESSAY

アート★エッセイ

## ことも以前の人

荒井 良二  
(絵本作家)



僕は今までに、子どもたちとのワークショップの場をたくさん経験してきた。きっとこれからもいろんな子どもたちとの出会いがあるんだろう。僕がやめないかぎり。

講演会の依頼が多くなった時に、講演会の代案としてあげたのが子どもたちとの「共同作業」だった。ひょんなことから生まれたことが僕にとっては大事な時間になってきている。

僕は元来話るのが下手で、できれば他の手段で何かを伝えたいと願ってきた子どもだった。それは、大人になった今でも何の変わりもない。そして今からもそう思うだろうと思う。

僕のワークショップは、「大人＝先生」という図式をいかにして壊すか、ということを優先する。それは当たり前の話だ、この場は学校ではないのだから！ たただ、共同作業の「きっかけ」を与える役目の人としているのだ、というふうには。僕は、その場に参加した子どもたちの持っている「力」のよ

うなものを引き出せれば！ と願っている。かなり生意気だ。でも、それに近い体験をさせたい！ と思っている。「優・劣」などという評価に屈服する以前の、皆んなが持ち得る「創造する」という力を何とか引き出したいと思っている。そして、それを持って帰ってほしいと願っている。それこそを持って帰ってほしいと思う。大事なのは僕が参加した子どもたちに「何か」を与えるのではなく、自分の中にある確かな力を感じてほしいと切に願うのだ。

人間誰も答えを欲しがら。それも早く早く欲しがら。わかる事はとても重要だが、答えのない事を考えるのも重要だろう。僕はそれを伝えたい。答えのない事に大人は口を噤むが、子どもたちはそれを言葉ではなく形にする能力を持っている。そして僕は、ワークショップでその力を目の当たりにし、手放して喜ぶ、子ども以前の人でありたいのだと思う。  
(あらい りょうじ)



「東京都武蔵野市立  
みどりのこども館 玄関」  
(2009年)

特集

新学習指導要領の〔共通事項〕がわかる！

第 4 回

〔共通事項〕がわかる！ — Part4

## 〔共通事項〕の象徴は「養」という字で表したい

唐突だが、皆さんの中には一度や二度の腰痛経験を持たれ、腰の重大さを痛感したことを思い出される方も多いのではないかと。

普段の生活では意識せずに動かしていた全身が一撃で激痛とともに機能不全になってしまう。とはいえ、腕や脚の一部を動かすことはできるのだが、肝心の全身を支える動きが取れない。肉月に要と書いて、確かに「腰」と読む訳を体感せざるをえない。

さて話は変わるが、今回の学習指導要領の改訂に目を向けると、美術科・図画工作科における〔共通事項〕の新設が注目され、さまざまところで話題になっている。

学習指導要領をひとの身体に例えるなら、その身体的な機能を含む全身は、美術科・図画工作科そのもの全てと置き換えることができる。また、身体の一部である腕や脚は差し詰め表現や鑑賞といえる。

ひとの腕や脚ではないが、それぞれの部分が個別に活動しても一部の役割を果たすことにしか過ぎず、躍動感あふれる全体の学習活動とはならない。

一方、躍動感あふれる全体の学習活動を支えるには要となるべき内容の整理と統合された明確な項目を設ける必要がある。今回の学習指導要領改訂はその要を担うべき〔共通事項〕を新設したところに大きな意味や価値があるといっても過言ではない。

そこで、全身の要である「腰」ではないが、美術科・図画工作科の要である〔共通事項〕を表す象徴として、美術科・図画工作科の美に要と書いて「養」を〔共通事項〕と表したい。

## 〔共通事項〕をどう考えるか

東京学芸大学教授 柴田 和豊

### 1. はじめに

文部科学省のホームページには新しい学習指導要領に関するQ&Aが掲載され、その中に〔共通事項〕を新設した経緯が記されている。考察の出発点として、小学校図画工作科の回答を見ることから始めよう。

「小学校図画工作科に関しては、いろいろな調査等から、児童が図画工作を勉強しても、生活や社会にどのように役立つのか分からないと感じていることが分かりました。また中央審議会などで、膨大な視覚情報にさらされている児童に必要な力を身につけてほしいという声がありました。そこで、表現でも鑑賞でも、造形遊びでも絵や立体、工作でも、共通して働いている資質や能力を〔共通事項〕としてまとめ、これをもとに指導を行うことを示しました。具体的には、児童が自分の感覚や活動を通して形、色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえ、これを基に自分のイメージをもつことが十分に行われるように学習活動を検討する必要があります。」

一言でいうと、「何に向けての図画工作か、美術教育か」を明確にしようとしている。造形性をめぐる学習を進める中で、自分の感覚に目覚め、自分を核とする活動に出会うことの大切さ、自分のイメージ・世界を作り上げていくことのかげがえのなさをあらためて強調するとともに、それらによって得られた力で子どもたちが向かうべきものを取り上げているといつてよい。

このような基本的な指摘は「いうまでもないこと」を再確認しているに過ぎないとも思える。独自の造形表現が大切なこと、それを可能にする力を育てていくことが大切なことは、すでにひとつのコモンセンスになっているはずだからである。

そのために、〔共通事項〕が別建てで示されたことに違和感を覚える人たちがいるかもしれない。

これまでの学習指導要領の形でもそれなりに美術教育の基盤は語られており、新しい学習指導要領の二階建てのような構成は、話を複雑にするだけではないかという受けとめ方もあるように感じている。

それでは、どうして〔共通事項〕が記されるようになったのだろうか。

### 2. 技能中心の考え方の是正

美術作品や自分の美術的能力の評価に関する最も一般的な目安はおそらく「上手、下手」だろう。対象をどれだけうまく再現しているかで作品の優劣をつける空気は強いし、自分の造形的な能力を「うまく描けないからダメだ」と技術優先的な考え方で見限る傾向も目につく。このような風潮のもとでは、美術教育が技能的レベルを超えるものとして存在するには、自覚的な努力が必要になってくる。

上述のような傾向が生じるのは、図工や美術が絵の具や紙、土や木、布や金属などの材料に何らかの加工を施すことによって、イメージしたものを表すという、表現の二重性によるところが大きいだろう。どのような想像的世界も、それらを造形的に定着させない限り、人々が受けとめることのできるものにはならない。様々な素材や道具を操作し、表そうとするものを浮かび上がらせていく。それが造形表現のプロセスである。

ところで、そのような二重性の中から、造形的作業が一人歩きする場合は少なからずある。「何を表すか、何を伝えるか」をさておいて、色の塗り方や材料の切り方の丁寧さなどからはじまる造形物の完成度のほうにかなりの注意が向けられるのである。造形的な作業はそれに没入するだけの楽しさがあれば、多くの手間ひまを要するものでもある。だから、そのことに集中することは奇異なことではない。ただ問題は、図画工作・美術科が

造形活動を通して何に取り組もうとしているかを視野の外においてしまうことである。表現へと子どもたちを促すもの、形作られたものが象徴的に表しているものを把握していくことは、作品の完成度などとは比較にならないほど大切なものである。新しい学習指導要領が示す〔共通事項〕は、表そうとするものと、それを表すための方法の有機的な関係を実現するためのものといつてよいだろう。

### 3. 〔共通事項〕の読み方

学習指導要領を明晰に理解し、自分の中で構造化することは意外に簡単ではない。少なくとも私にはそうである。子どもたちの成長に即して、学習への視点が少しずつずらして示されていくことから、各学年の記述はわずかの差異があるだけの似たものになり、全体の展開が掴みにくい文章になりがちなることを、その理由としてあげることができる。

例えば、〔共通事項〕のイをみると、小学校1・2年では「形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」となっているのが、5・6年では「形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。」となり、中学校1年では「形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」となっていくが、互いに大きな違いはなく、発展の原理を求めようとする、少なからず迷ってしまう。発展的に推移しているとはいいがたいのである。原理的なことがぶれては困ることを考えると、そう違わない記述でも不自然でないと、私は思っている。しかし、ダイナミックな展開ではなく、同じところを周回している感のある学習指導要領の記述を、多くの人たちはどのように読むのだろうか。

まず浮かぶのは、一言一句を正確に読み込んでいこうとする姿勢である。学習指導要領が多くの善意の努力で生み出されていることを考えると、その姿勢は誠実な望まれるものであるといえる。ゆるやかな展開は、注意深く読まなければ、その要点を見落としかねない。

しかし、その読み方で懸念されるのは、視点を局所におくと全体が見えなくなることである。学年ごとの記述に通ずることで学習指導要領のエッ

センスが把握できるかということ、そうとは限らない。なるほど、「A表現」「B鑑賞」に関する記述では、活動をできるだけ具体的レベルで示そうとしていることから、学年ごとの記述の細部にこだわるのが重要になる。例えば、小学校1・2年のA表現に「並べたり、つないだり、積んだりする…」という活動があるが、それらはまさにそのことに密着して考えるべきことである。それに対して、〔共通事項〕には図画工作・美術教育の基本的理念に関わることを示そうとする面があることから、巨視的な見方が必要になってくる。

私見では、〔共通事項〕を記すことの意義が小学校から中学校を通して最も鮮明に出ているのは、小学校の1・2年だと思う。「私(自分)が感じること、私が活動すること」「私のイメージ世界を作っていくこと」という美術教育の原点が明快に示されている。しかし、学年進行とともに学習内容の確実なステップアップを図る中で、〔共通事項〕はより即物的な造形要素が目立つものとなっていく。一応の帰結点である中学校2・3年の〔共通事項〕は、「ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」となり、造形活動を行う主体よりも、造形的な対象への視線をより感じさせられるようになる。私からするとトーンダウンである。

もちろん、中学校2・3年の美術科の目標を併せ読むと、美術科が関わろうとするもの、向かおうとするものがより分厚く記されていることは知っている。だが、冒頭の文部科学省のホームページ上の〔共通事項〕を設けた理由についての回答が、何に向けての美術教育かを考えることの必要性に触れていることを考えると、〔共通事項〕は学習対象としての造形性のレベルを越えて、美術教育の意義に論及するものであるべきだろう。

上述のように、〔共通事項〕は重要な意味をもつていながらも、学年間の推移が掴みにくいことによる分かりにくさを抱えている。そのような状態を改善するには、何より〔共通事項〕をより分かり易いものにしていかねばならないが、現実的には、読み手が美術教育の基軸を自分なりに据えて読むべきと思う。一字一句に釘付けになるのではなく、学習主体としての子ども・生徒への視点、

図画工作・美術が人間をめぐる何に取り組むべきかという問い、そしてどのような方法によって活動していくかという軸を設定した上で、巨視的に読むほうがよい。小学校の〔共通事項〕は、人間の感覚的世界・活動の大切さ、それらに関わる方法としての造形活動、そして自己の創造的世界の創出という重要な課題を提起している。そのことをこそ押さえておくべきだろう。

### 4. 図画工作・美術科の大きな特色

図画工作科の〔共通事項〕の最も特徴的なキーワードは「自分の感覚や活動を通して…」 「…自分のイメージをもつこと」 だろう。これらのフレーズは1～6年生を通して繰り返されるものであり、まさに柱となっている。

この国の20世紀後半の美術教育に対して、主観中心的・自己表現中心主義的としてバランスを欠いていたという強い批判があることは知っている。しかし、教育全体を見渡すと、子ども・生徒たちが内容を決定できる場面が殆どないこと、それに対し、図画工作・美術科が作品を作っていく中で、「自分が決定し、自分の世界を作り出す」ことに取り組んでいるのは特筆に値する。通常1+1=3という逸脱は許されないし、He be a boy. とすることも受け入れられない。知識の学習は、知識の習得によって子どもたちの可能性を拡大していくための基盤であり、その重要性はいうまでもない。けれども、教育の中心には創造する主体としての子ども・生徒たちがいるのであり、かれらの発信こそが価値創造の原点であることも見逃してはならない。図画工作では「なに色に塗るか」「どんな形にするか」をはじめ表現の中身の決定は基本的に学習者に委ねられ、正答は用意されていない。そのことの教育的意味は大きい。

ここ数年、学力低下の問題が様々に取り上げられてきた。主な論調は、学習内容・量をゆとり教育以前に戻すことであり、子どもたちが生み出すものよりも、知識・技術の習得にウエイトを置くものであった。けれども、私はこのような動向に対してはバランスが大事だと思っている。子どもたちが受け取るもの・子どもたちが発するもの、言いかえると、インプットとアウトプットが連動してはじめて教育はうまく進むことができるとみ

るのである。例えば、自尊心をもつことのできない青少年の多さが社会的な問題となっているが、そのかなりはインプット中心の教育への不適合が引き金になっていると見ても間違っていないだろう。受験体制に向かう中で子どもたちの多くは「…ができない」という形で負の感情を蓄積している。それに対し、図画工作・美術では自分の中にある豊かさを浮かび上がらせることを大切な課題として位置づけている。学校での学習以前に、幼い時から触れてきたもの・見たもの・経験した事柄などが重なりあって形づくられてきた自分の内的な世界を、造形活動を通して表すことを支えようとしている。そのことによって、子どもたちの間にそれぞれの生きる原点への愛着が芽生えていくとあってよいだろう。

### 5. 感覚の広がり

すでに記したように、図画工作科の〔共通事項〕のキーワードの一つは「感覚」である。自分の感覚によって色や形、それらの組み合わせなどをとらえることが主要テーマとして記されている。

ところで、その箇所は典型的な学習指導要領の文章とあってよいだろう。学習指導要領は具体的に活動を示すべきことから、簡明な記述が求められる。本当はもっと書きたいが書けないという側面が学習指導要領にはあるといいかえてもよい。そうだとすると、考えてよいのは、感覚との関わりを色や形をとらえるという視覚性の範囲を超えてより広く考えてみることである。その必要性は、造形遊びや実材を使った工作的な活動の実際をみると容易に理解できるだろう。いろいろな材料やさらには自然の現象に体で触れる活動では、視覚にとどまらず身体感覚への総合的な関わりが生まれている。例えば、木を切ったり削ったりする中で、ざらざらやつるつるという触感に出会う一方、木の香りに包まれるという体験もする。あるいは作った羽飾りを身に付けて戸外で駆けっこしてみたり、木と木の間張ったロープに幅広の荷造りテープを構成的に吊すような活動では、風を体で感じたり、風の音を聞いたりする。そのように図画工作では感覚が多面的(五感)に相関している。だからこそ子どもたちの成長に深く関わるのであり、それができるといえる。

さらに、表現活動における反応は感覚だけでなく、感情と意識の領域にも広がる。感情表現は美術教育の中心的な活動であり続けてきた。児童画には子どもたちの喜怒哀楽が凝縮されているといっても大げさではない。また思春期の作品に、人間について、世界についての問いが内蔵されていることも周知の通りである。美術教育は人間と人間が抱える問題に多面的に関わりをもつものなのである。

このような連関の中で感覚の大切さが強調されるのが近年の動向とあってよいのだが、そこには感情や意識という人間の深部だけでなく、いわば表層部へも視野を広げようとする姿勢がある。触る、こねる、丸める、破る、ちぎるというような素朴な行動の積み重ねの中で子どもたちの身体感覚は開かれていく。感覚的に開かれた身体を核にしてこそ、感情と意識に関わるよき教育を展開していくことが可能となるのである。

### 6. 造形が育むイメージの世界

教育の目的、社会の在り方、生き方なども、人々がそれらについてもつ像(イメージ)によって方向づけられていく。イメージは、人間の行動を導く最大の原因エネルギー、もしくは羅針盤であるだろう。そうであるなら、イメージを豊かにもつことによって、生きることの質も充実したものになっていくとあって差し支えない。

だが、自由に創作してよいという課題が実は簡単でないように、ものやことの姿・イメージが自動的に湧いてくるかというところとそうとはいいたくない。見立てという行動がよく知られているように、何かを見て、そこから何かを連想するという活動を多くの人たちは経験している。イメージを導くきっかけがあれば、イメージの立ち上がりは容易になるということである。

造形活動がそのためのすぐれた方法であることはあらためていうまでもない。幼児のお絵描きを見ていると分かるが、はじめ運動的になり描きを楽しんでいた子どもたちも、描かれた痕跡に「ブーブー」とか「おうち」とかというような言葉を発するようになる。それは、線や色の重なり、それらで生まれた形がイメージを発生させるからである。また、柔らかな粘土を手のひらで握りしめて

できた形にお魚を見つけ出したりする。それも造形素材が介在して可能になるのである。

受験体制下の教育にあっては、言葉以外の伝達・表現方法を軽視する風潮があるが、音にしても造形にしても互いに言語と補完しあっている。それらは言葉以前の生理的・感覚的反応に関わりあえるものであり、言葉はそのような反応を意識の中に定着させていく。従って、各教科は人間の成長に欠かせない要素を分担して育てているといえるのである。

図画工作の学習指導要領は、他教科で担うことのできない造形的な要素についての段階的な習熟を目指している。小学校1・2学年では「身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思い付いてつくること。」(A表現(1)ア)、「好きな色を選んだり、いろいろな形をつくって楽しんだりしながら表すこと。」(A表現(2)イ)と記され、それが5・6学年では「材料や場所などの特徴を基に発想し想像力を働かせてつくること。」、「形や色、材料の特徴や構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、表し方を構想して表すこと。」となる。身近な表現材料と親しむレベルから、行動する場・空間までを包含する学び、材料を組み合わせることで新たな関係を生み出す学びへと活動は広がっていくのである。

この他にも色、形、光、陰影などの造形要素、鉛筆や絵の具・紙や布・土や木・金属や化学的素材などの諸材料、筆や定規・彫刻刀や鋸等の道具類などのいろいろな組み合わせから、様々な造形活動が生まれる。原初的なものから高度なものまで実に多様に…。造形活動は図画工作・美術科にとって何よりオリジナルな部分であり、子どもたちはそれらに親しむ中で、造形の特長や手法、造形がもたらす心理的・精神的な作用、さらに造形作品に内在するイメージなどについての理解を深めていく。〔共通事項〕は、そのような一連の広がりから、学習が過重なものにならないように、自分に合ったかたちで造形に親しみ、造形活動が様々なイメージを現出させることに気づいていくということを中心に、学習の方向を示そうとするものであるとあってよいだろう。(しばた かずとよ)

略歴

1948年生まれ。専門は美術教育論。

## 「見る」「知る」「読む」

「信濃デッサン館」・「無言館」館主、作家 窪島 誠一郎

### 「美術教育」の三原色

「見る」「知る」「読む」——私はこれが美術教育(あるいは美術鑑賞)の三原色であると考えています。青緑、赤紫、黄という三つの色が色彩の基礎を成すものであるとするなら、「見ること」「知ること」「読むこと」の訓練こそが、人間の豊かな感受性、情操性、想像(創造)力をはぐくむ大切な基礎になると考えているのです。

もちろん、ここでいう「見ること」とは、単に視覚的に芸術作品を捉えることではなく、作品の存在にかかわるすべての事象、現象を見ぬく洞察力を養うことです。また、「知ること」とは、知識としてそれを表層的に理解するだけでなく、その作品が表現されるにいたった歴史や事由、作者の意図や思想的な背景を徹底的に探究することです。そして、「読むこと」とは、その「見る」「知る」という営みを通して、作品が語る「言語」をききとり、自分自身の言葉で作品と会話をかわすということです。

この三原色を身につけさえすれば、もう鬼に金棒、美術館で先人の芸術作品の前に立ったときだけでなく、日常生活においても心豊かな時間をおくことができるでしょう。何気ない町の風景や道ばたの花、雨上がりの雲までが、人間の有限の生命にあたえられた大きな喜びであることに気づかされるでしょう。

「見る」「知る」「読む」の三原色を学習することは、人がより豊かな情操生活をきづくための「人間教育」の根幹であるといっているのかもしれない。

### まず、「本モノ」を見る

少し宣伝めくのですが、私は二年ほど前に『絵を見るヒント』(白水社刊)という本を書きました。私の本としては売れているほうで(といっても四

刷りぐらいですが)、いわゆる美術鑑賞の入門編といったふうな本です。

「絵は何の役に立つか」「絵がわからない人のために」「絵と記憶の関係」「展覧会を百倍楽しむ法」……そんな章立てをみてもわかるように、私はこの本のなかで「絵をみること」のもつ面白さと楽しさ、一度ハマったら病みつきになる「絵をみること」の魅力について書きました。「見る」という訓練や習慣を積み重ねることによって、人間がどれだけ想像(創造)力にみちた豊かな生活を体験することができるか、どれだけ日常の出来ごとや目に入る風景を深く、正確に観察できるようになるか、つまり、「絵をみる」という行為を通じて、どれほど人間がよりすぐれた生き物としての能力を発揮し得るようになるか、という可能性を書いたのです。

その「見る」というレッスンに、もっとも適しているのが小・中学時代であるということに異論をはさむ人はいないでしょう。

ピアノや外国語の習得が今や二歳児、三歳児の頃からはじめられ、中学に行くようになってからはもう遅いとまでいわれるのと同じように、「見る」という能力もまた幼少期からの訓練で大きく差がつくように思われます。三つ児のタマシイ百まで、とはよくいったもので、幼い頃にたたきこまれた「見る」習慣、「見る」訓練は、成人してからの芸術の鑑賞や物の見方に大いに役立つというわけです。

問題は、この「見る」という訓練をどのようにして幼少期、少年期の子供たちに習慣づけるかということです。

一つは何とんでも、子供たちに幼い頃から美術作品にふれる環境、できれば「本モノ」を見ることのできる環境をあたえることではないでしょうか。それにはふだんから「美術館」に親しむ生活を身につけることが大切です、せめて月に一

回ぐらいは、家族といっしょに(あるいは先生といっしょに)展覧会をみにいくという習慣があってもいいでしょう。生徒たちの美術鑑賞への意欲をたかめるために、教室の一隅に「美術館」のパンフレットや展覧会のスケジュール表が置いてあってもいいかもしれません。

また、当『造形ジャーナル』の405号でも布施英利さんが提案されていましたが、小・中学校の図工室や廊下の一隅に、たとえ小さな版画であってもピカソやマチスの「本モノ」が掛かっていたら、子供たちの美術作品に対する意識は大きく変わるはずで、いや、ピカソ、マチスのような大巨匠でなくとも、せめて国内外で活躍する新人作家のデッサンでもいいから、朝な夕な子供たちが遊び回る生活圏に「本モノ」の絵が飾ってあったら、それだけで子供らの美術への意識は大いに目ざめるはずなのです。それは、「本モノ」の絵を見ることによって、子供たちの心にいわれる美の基準値をそなえることができるからです。

たとえば、多くの若者(今や若者ばかりとはかぎりませんが)の生活に浸透しているコンビニで買う弁当や漬け物の味は、けっして家で母親がつくってくれる弁当や漬け物に敵うものではありません。とくに漬け物などの差は歴然としています。母親が丹精して漬けた本モノの漬け物の味を知っている者なら、いくら安易に手に入ってもコンビニの漬け物を美味しいとは思わないでしょう。しかし、本モノの味を知らなければ別です。コンビニの漬け物を、真の「おふくろの味」と思いこんでしまうでしょうし、大量消費をあてこんだ格安弁当こそが「本モノの味」と思いこんでしまうことでしょう。

つまり、幼少期から「本モノ」の絵にふれさせるといことは、その子供が将来出会うであろう「偽モノ」に対する嗅覚を養うことにもなるのです。昔、コーヒーのコマーシャルで「違いがわかる」という言葉が流行したことがありますが、子供たちにいち早く「本モノ」をみる喜びをあたえることは、その「違いのわかる」人間を育てることでもあるのです。

### 「見る」から「知る」へ

もっとも、先頃亡くなった私の尊敬する評論家

草森紳一さんなどは、「絵は本モノでなくても複製でじゅうぶん」という考えの持ち主でした。見る側に想像力と感性、知識さえあれば、かならずしも絵は本モノである必要はなく、画集やカタログののっている図版でじゅうぶんその本質を見ぬくことができるというのです。

また、かの「批評の神様」とよばれた文芸評論家の小林秀雄が、一枚の複製画をみただけである有名な「ゴッホの手紙」を書いたことはよく知られています。小林秀雄はゴッホの最後の作品「鳥のむれ飛ぶ麦畠」をみて感動し、それがきっかけで「ゴッホの手紙」を書き起こしたといわれていますが、何とそれは、本モノの作品ではなくて美術館の売店で売っている複製画をみてのことだったらしいのです。そして、もっとびっくりするのは、小林秀雄は「ゴッホの手紙」を書き上げたのちに、たまたまアムステルダム美術館でゴッホのオリジナルの「鳥のむれ飛ぶ麦畠」をみる機会に恵まれるのですが、そのときは最初に複製をみたときほどの感動を覚えなかったというのです。

これは、小林秀雄という人が「本モノ」をみる以前から、ゴッホという画家を深く理解し、その人間像を鋭く観察していたという証なのでしょう。小林秀雄にとっては、その絵が「本モノ」であるか複製であるかなんてことはちっとも問題ではなく、それが自分の感動した「鳥のむれ飛ぶ麦畠」でさえあればよかったです。

そんな天分をそなえた「批評の神様」小林秀雄になることは、私たち凡人には容易ではないかもしれませんが、ここで問われるのは「見る」以上に「知る」というレッスンの重要性です。子供たちに「本モノ」にふれる環境をあたえ、日頃からすぐれた芸術作品を「見る」生活になじませたあとは、とにかく「知る」努力を惜しまぬ人間に育てあげねばなりません。

「知る」レッスンは、やはり「本を読む」「資料をめくる」という習慣をいかに身につけさせるかにつきると思われます。自分の眼でみた芸術作品が、だれの手によって表現され、それがどういう時代背景をもち、どういう動機によって創作されたかという問いを、1ページ1ページ本や資料をめくることによって解決していくという作業が大切になってくるのです。

多少手前ミソになって恐縮ですが、私が経営する「無言館」という美術館には、最近「オリーブの読書館」という名の図書館が併設されました。「無言館」というのは、先の太平洋戦争や日中戦争に出征して戦死した画学生たちの遺作や遺品を展示している美術館なのですが、ちょうど絵を見終わった人たちを待ちうけているような(?)エリアに、約三万冊ほどの本(主に美術、文学、戦争の資料など)を収蔵する小さな図書館をオープンさせたのです。「無言館」の出口は「図書館」の入口と同じ場所にあって、そこには直接外に出たい人は右手へ、本を読みたい人は左手へ、といったようななかなか巧みな案内板がかけられています。

効果のほどはまだわかりませんが、私がここで試みようとしているのは「見る」と「知る」の同時レッスンです。

美術館で絵を鑑賞した人たちが、今度は図書館で本を手にするによって、より深く「見たもの」を考察し分析し、その作品の背後にある歴史文化、風土、その作品を生み落とした作者の思想信条を探求するわけです。作品がどのような動機で描かれ、どういう経緯でここに存在しているのか、人々は自分が実際に「見たもの」の真実を、今度は「言葉」によって説き明かす場所をあたえられるわけです。

そう、「見る」レッスンが美術鑑賞における直観力、喚起力を鍛えるものとしたなら、「知る」というレッスンは、芸術作品を言葉によって分析する読解力を鍛えるメニューとっていいのかもしれない。

全国の小・中学校美術教師の皆さん、私の実践する「美術館プラス図書館」の試みをぜひためしてみたいかがでしょう。

もちろん、小・中学校に「美術館」の開設はムリかもしれませんが、図工室の一角に小さな図書コーナーを設けるぐらいのアイデアはあっていいかもしれません。

### 「読む」ということ

「美術教育」の三原色の最後の一つ、「読む」ということについて考えてみることにします。

冒頭でのべたように、ここでいう「読む」の意味は単に「読書をする」ということをさすのでは

ありません。もちろん、子供たちの感受性、情操性をはぐくむにあたって「本を読む」というレッスンを欠かすことはできないのですが、ここでいう「読む」とは、自分が関心や興味をもった芸術作品、たとえば一つの彫刻であったら、その彫刻にこめた表現者の思想や考えを「読みとる」ということです。「読む」という言葉は、しばしば「人の心を読む」とか「先を読む」とかいったふうに使われるときがありますが、まさしくここでいう「読む」は、芸術作品が何を主張し、何を表現しているかを正確に読み解くという意味なのです。

そこで、私がぜひ提唱したいのは「なぜ」「なぜ」教育です。

「なぜ」「なぜ」教育とは、とにかく子供たちに目の前の作品に対して「なぜ」「なぜ」を連発してもらうという試みです。

たとえば一点の絵があります。一人の裸の女性がうつむいて座っているデッサンです。みるからにさみしそうな女性です。その絵にむかって子供たちに「なぜ」「なぜ」を連発させます。「なぜこの女の人は悲しそうなのか?」「なぜこの女の人の手はゴツゴツしているのか?」「なぜこの女の人は痩せているのか?」「なぜ画家はこんなにさみしそうな絵を描いたのか?」「なぜこの絵は……」子供たちにその絵に関するあらんかぎりの「なぜ」を連発させるのです。

そして、今度はそのたくさんの「なぜ」の解答を自らの力でみつけるべく、子供たちに出来るだけたくさんの画家の伝記や作品の解説を読んでもらいます。その作品がどのように生まれたか、その絵を描いたとき画家はどんな生活をしていたか、モデルの人はどんな人だったか、子供たちは夢中になって自分たちが発した「なぜ」を解決しようとするでしょう。

お気付きの人もおられると思いますが、これはゴッホの「悲しみ」というデッサンです。髪の毛の長い一人の女性が膝のあいだに顔をうずめて座っている、ゴッホが初期に描いたデッサンです。ゴッホの伝記を読むと、この女性が貧しい娼婦であることがわかります。しかも五人も子供のいる、そんなに若くない娼婦です。子供を育てるために苦勞した女の手は、まるで男のようにゴツゴツとしています。伝記によると、ゴッホはこの女性を愛

して、二十か月もいっしょに暮したことがあるそうです。ですから、ゴッホは貧しい痩せた女性の身体を、やさしい<sup>い</sup>労<sup>い</sup>のような線で描いています。ゴッホは、この女性の人生がもつ「悲しみ」をも愛していたのかもしれませんが。

……………ここまでわかれば、ようやく子供たちはこの絵を「読みとる」ことができたといっているでしょう。

くりかえしになりますが、子供たちに課す「なぜ」「なぜ」教育は、一つの作品(芸術作品だけでなく私たちの周辺にあるすべての事象や現象)の奥に、いかに複雑で魅力的な秘密がかくされているかということを知る、私たちが「美」を発見するためのレッスンなのです。これまで何気なく見過ごしてきたものが、「なぜ」という疑問を発することによって、思いもよらぬ真実の姿をさらけ出すのです。そう考えると、私たちは日頃、いかに多くの「なぜ」を不発弾のように胸の奥に仕舞いこんで生きているかに気付かされるのですが。

### ふたたび、「三原色」のこと

さて、ここで二つ三つ、美術教育における「三原色」について補足しておくことがあります。

それは、青緑、赤紫、黄の三色だけでは、思ったような色彩の絵が描けないのと同じように、美術教育もまた「見る」「知る」「読む」という個別の訓練を重ねるだけでは、本当に「美しいもの」を発見する眼、感じる眼を養うことにはならないということです。

たしかに美術教育の根幹は、「見ること」「知ること」「読むこと」のレッスンにあるといえますが、その三つが、人それぞれの個性によって混ぜ合わされ、重ね合わされた結果、初めて「感じる」という領域にたどりつくのです。「感じる」という感覚は、ときとして「見る」という段階において発生すると考えられがちですが、私は「見る」「知る」「読む」の三原色が、一人一人の「個性」という名の絵皿の上で練り合わされ、こね合わされなければ、「感じる」という境地には至らないと考えているのです。

今、全国どこの書店にもならんでいない中野京子さんの人気美術書『怖い絵3』(朝日出版社刊)の「あとがき」で、中野さんはこう書かれています。

『絵は純粋に感性だけで見るべし』と言われはじめたのは、いつ頃からだったでしょう。教養主義が『押し付け』と感じられ、反感を持たれるようになったせいも、それとも現代芸術家たちによる、『何の先入観もなしに作品を見てほしい』という願いに応えるうち、近代以前の絵画までが白紙状態で鑑賞できると信じられてしまったためなのか……。知識は余計なものではありません。」

なるほど、その通りだなと思います。

私もどちらかというと、中野さんのいう「絵は純粋に感性で見るべし」推進派の一人なのですが、ここでいわれている「知識は余計なものではない」には深く頷けるのです。余計なところか、知識を学ぶことは「感じる」に至るための必須条件であるともいえるでしょう。つまり、美術鑑賞における「感じる」という知覚は、「見る」(感性)という営みに「知る」(知識)という営みが加わってはじめて実現されるもののように思われます。

そう、それが「三原色」を混ぜ合わせ、練り合わせることによって得られる「感じる」という到達点なのです。

考えてみますと、他のあらゆる教育がそこに帰結するのと同じように、美術教育もまた、人間一人一人に内在する「人間力」、いわば「生きる力」を育てる教育であることに変わりありません。最初にのべたように、日常生活のなかで人間が人間らしく生きることの喜び、人生の喜びをたかめることこそが、美術教育の最終目的であるといえるのでしようから。

最近、私の「無言館」の感想文ノートに綴られてあった、こんな小学校六年の生徒の文章を紹介して終わりにしたいと思います。

「最初、戦争で死んだ画学生さんの絵をみたときは、どの絵もとても悲しそうでした。でも、学生さんの手紙を読んだり、学生時代の写真をみたりしているうち、学生さんは絵が描けて本当に幸せだったんだと思うようになりました。絵の中の恋人や奥さんもとても幸せそうにみえてきました。」 (くぼしま せいいちろう)

#### 略歴

1941年生まれ。主な著書に『父への手紙』(筑摩書房刊)、『私の「母子像」』(清流出版社刊)、『戦没画家巖光の生涯』(新日本出版社刊)、『美術館晴れたり曇ったり』(一草舎刊)などがある。

# 子どもの椅子

FROM

北海道札幌市立平岡中央小学校  
二ツ山 かおる



## 光いっぱい なかよしランド

子どもというのは、とにかくひみつ基地や隠れ家のようなものが大好きである。私も小さいときは押入れや近所の林の中に、よく隠れ家を作って友達と遊んでいた。なんだか自分だけの自由な世界ができたようで、すごくわくわくしていたのを覚えている。

何年前か、そんな隠れ家をみんなで作ろうということになった。3年生が自分たちの力で集めてこれるような素材といえば、新聞紙や段ボール、お菓子の箱くらいである。でも「せっかく作るのだから、誰も作ったことのないようなもので作りたい…」と、みんなで頭を悩ま

せていると、そこに夏休みの自由研究で作ったペットボトルの船が目飛び込んできた。「先生、これだ。ペットボトルにしよう！」子どもたちの目がキラリと輝いた。ペットボトルは軽くて丈夫であり、透き通っているため、色水などを入れてもきれいである。また、屋根をつけても光が入って明るい。まさに隠れ家を作るにはぴったりの素材であった。

そこから、子どもたちのペットボトル回収作戦がスタートした。初めは自分たちの家から出るペットボトルを集めてきた。しかし、つなげて壁や屋根にするためには色や形、大きさなどをそろえなければならない。更に、作っているうちに、メーカ

ーや飲み物の種類によっても、丈夫なものと、そうでないものがあることが分かってきた。こちらから教えなくても子どもたちはちゃんと丈夫さを組み立てやすさに目を向けるようになっていったのである。「あのね、先生、〇〇の△△茶のペットボトルが一番丈夫でつなげやすいんだよ。だからぼくの家は、そのお茶しか飲まないんだ。」と言った子がいた。それほどまでに子どもたちはこの隠れ家作りに没頭していたのである。それから、同じ形、同じ大きさのペットボトルを集めるために、子どもたちは自主的に他のクラスや学年にも呼びかけ、しまいにはスーパーや近所の家を回るなどして奮闘した。あっという間にワー

クスペースは、ペットボトルの山になった。目的をもった子どもたちの行動力には本当に驚かされるばかりであった。制作中は、もちろん意見がぶつかることも多かった。しかし、それまで困った時には教師にばかり頼っていた子どもたちが、友達に相談したり、試行錯誤しながら自分たちで解決したりできるようになっていった。

完成したなかよしランドは、毎日子どもたちの笑顔であふれていた。校長先生を招待して給食を食べたり、他の学年の子と一緒に遊んだり、1年間思う存分楽しんだ。もちろん、この隠れ家作りが、3年生の「思い出ベスト1」に輝いたのは、言うまでもない。

図画工作科の授業に一番大切なのは「やってみよう！」という意欲と「～のために作りたい。」「完成したら～がしたい。」という目的意識なのではないかと私は思う。それがあれば、子どもたちは黙っていても自然に自分からいろいろなことを学んでいく。忙しい毎日ではあるが、私自身もどんどん新しいことに挑戦し、これからも魅力的な題材を開発していきたいと思っている。(ふたつやま かおる)



## 図工室

## 美術室

私の勤務校は周りを田に囲まれ、桜の木だけでも三十本以上ある様な学校で、児童に「本校の自慢できることは？」と尋ねると、真っ先に返ってくるのは

「きれいな緑」である。校務主任という仕事柄、外回りをすることが多くなり、その豊かな自然に飛び込むように遊ぶ子どもの姿がほほえましく見えてくるようになった。

朝の見回りをしている時、校庭の隅の一本の腐りかけた木を蹴りまくる児童を見つけた。注意をしようと駆け寄ると、四年生の中でもよく担任に指導されているA君である。図工を受け持っているクラスの児童だが、それほど話はしたことがない。みんなで大切にしている木を、

と厳重注意。しかし、よく見てみるとその木は立ち枯れしていて、いつ倒れてもおかしくない状態である。早速チェーンソーで切り倒すことにした。刃を木の根元に当て、いざ切ろうとしたその時、Aが「そこは危ない！」と叫んだ。Aの言うところを切っていくと、なんとそこからたくさんのカブトムシの幼虫が出てきたのだ。

そんな事件から一年以上が過ぎた。今でもAは、昆虫のお土産話を持って、週に一回いそいそと図工室へやって来る。決

して図工が得意な児童ではないのだが、どうして図工が好きなのか尋ねてみた。

「だって、図工の時間って、先生や友達と自分の好きなことのでいっぱいお話しできるでしょ？」

今日もたくさんの材料を持って図工室へやってくる子どもたち。きっとその材料の分だけの話題をもってきていることであろう。そんなキラキラ輝く子どもの思いをしっかり受け止められる図工室の先生を目指していきたいと思う。

(いとう りょう)

### 「図工室は宝箱」

伊藤 亮(愛知県愛西市立市江小学校)

### 「ワクワク美術室」

高橋 花子(神奈川県川崎市立南菅中学校)

「行くのが楽しみ!」「少しでも早く美術室に行きたい。」「行くとなんか待っている!」「心のオアシス美術室!」そんな美術室があったらいいなあと思っています。美術の授業自体が魅力的なのは勿論大切ですが、美術室という環境だって、ステキな作品が生み出される場所なのですから魅力的であって欲しいと思います。

我が校の美術室には、窓辺に一つのガラスケースが置いてあります。生徒の作品を展示していることもありますが、様々なコレクションが並べられていま

す。美術館グッズやミニチュアコレクションなどが展示されています。最近では、コンビニのシリーズ化された景品も登場しています。生徒には結構人気で、自由に中から出して触れることもできるので、授業前や休み時間に来て見ていく生徒もいます。

「シリーズとして集めると面白いね」「さわることができる、好きな角度から見られて面白い」「あっ、展示が変わった!」等々、生徒は結構見えています。

また、大きな作業机には、北

斎やダ・ヴィンチ、スーラ、エッシャーなど、名画のジグソーパズルが何種類か置いてあります。これがまた、パズルの好きな生徒が休み時間に来て、熱心に行っています。パズルは形や色、描かれているものとその位置関係などをじっくり観察していかないとピースがはまりません。ここでも生徒は知らずに鑑賞の学習をしているようです。

授業の合間の休み時間。美術室内は授業がなくても鑑賞の時間であふれかえっているようです。普通教室とは違う特別教室「美術室」が、物的な特別ではなく、心が十分に満たされていく特別な空間であって欲しいと思っています。

(たかはし はなこ)

# クズのつるでかごを作ろう

京都府与謝郡伊根町立本庄小学校 中西 邦郎

## 1. はじめに

本校は、自然に恵まれた校区である。日本海まで5分間、学校の前方には浦島太郎伝説で有名な「布引きの滝」があり、後方には浦島神社がある。また、側方には、鮎が生息し、日本海に繋がる筒川もあり、その川辺にはクズ等のツタ類やさまざまな植物が群生している。

私がクズのつるを教材として籠を作った理由は、地域の方々から本校に寄贈されたアケビのつるで作られた籠や太くて長いクズのつるで作られた花瓶の置台を児童が見て、自分たちも大切な物を入れる籠を作りたいと言ったのがきっかけである。

しかし、アケビのつるは、容易に採取できるような場所にはない。このような理由から川辺、土手、林のへりに植生し、自分で採取できる程度の太さ、長さのクズを取ることにした。このほうが足りなくなった時に補充がしやすいと思ったからである。

ご存知の通り、クズは、秋の七草の一つである。根からは葛粉、葉は飼料、茎は葛布の繊維源として昔から親しまれてきた。10mもつるを伸ばし、落葉する。葉が大きく、裏が白っぽいのですぐわかる。つるは、しなやかで編みや巻きに適している。

## 2. 活動のながれ

- (1) 校内のいろいろなつるを使った作品を見る。
  - ・クズの花かご、クズの花台、クズの野菜かご。
  - ・アケビの一輪挿し、アケビの花かご。
- ① つるの太さ、細さ、長さに応じて作品を作っていることを教える。
- ② つるの作品の素晴らしい点に気付かせる。  
(わからない時は、具体的にポイントを指示する。)

③ つるから花かご、一輪挿し、花台等の実用的、装飾的な作品ができることを指導する。

(2) つるを採取し、その特性(可塑性等)を理解する。

### ① 採取について

つるは、自分で採集するのが楽しい。低地の雑木林でもいろいろと見つけることができる。つるの採取時期は、葉が落ちる秋の終わりから冬にかけてが良い。春から夏にかけては、植物が成長しているので採っても色が黒ずみ、水分も多く、虫に食われたり、つるの質が弱くぼろぼろになってしまうことが多い。厳寒期のつるは、木肌が荒れて節は高く盛り上がり、つるも固くなっている。そのため美しく仕上がらない。

(ア) 服装：ジャケット、帽子、軍手、首廻り用タオル、長靴

(イ) 準備物：剪定ばさみ、縄(取ったクズを持って帰る時に括ってまとめるため)、ビニール袋(取ったつるを入れるために大き目がよい)

### ② 注意点

(ア) 他の樹木を折ったり、傷つけたりしないように気をつける。

(イ) からまったつるをはずす時は、ていねいに時間をかけてはずす。

(ウ) 高くよじ登ったつるは、力にまかせて下から無理やり引っ張らない。

(3) 作品、資料(写真)を見たりして作りたい籠の形を考える。

- ① 校内のいろいろなつるを使った作品を見る。
- ② 資料をもとに籠の形を考え、ラフスケッチをする。

(4) 基本的な編み方を知る。

- ① 十字組み、米字組みを指導する。(ここでは、米字組みを指導する)

② 編む順序を指導、確認しておく。

(5) つるを編む。

○ そろえておきたい道具

- ・ 剪定ばさみ(花やつる等を切る時に使う)
- ・ ナイフ(つるを斜めに削って、重ねつぎをする時に使う)
- ・ 目打ち(編み目を整える時に使う)
- ・ 霧吹き(乾燥させたつるを水で湿らせる時に使う)

① 米字組みを使って底部を作る。

- ・ タテ芯の本数や太さを変えることで大きな盛りかごにも応用できる組み方である。

② 上部を仕上げる。

- ・ タテ芯を内側に入れこむように形付けしながら自分で計画した高さまで編む。
- ・ 最後のタテ芯は、初めのタテ芯の留め穴に外側から内側に差しこむ。

③ 持ち手を作る。

- ・ 持ち手を取り付ける時には、ねじって編み目に通して止める。

(6) 鑑賞する。

- ① 自然素材であるつるは、同じ太さでも色艶や曲がり具合等1本ごとに全て違うので、その素材を生かした形等の面白さを味わう。
- ② 素材としての面白さと個性豊かな作品の素晴らしさを見つける。

## 3. おわりに

自然の草花は、子どもの頃に遊び相手になってくれた。しかし今や、子どもから子どもへ伝承された自然との遊びや物作りはなくなってしまった。子どもの興味をそそるゲーム等が次から次へと現れてきたのも一因であろう。

児童が優しい心を持ったり、優しい気持ちになれるのは自然と触れ合う時である。ゆえに児童にとって自然との触れ合いは欠かすことのできないものである。小学生期(6~12歳)は、人間としての人格形成に最も大切な時期であり、自然から学

び、触れ合う体験が必要になってくる。人間は歴史的に見ても自然との関わり、自然から学ぶことにより進歩してきた。図画工作科の時間のみならず、いろんな機会にできるだけ多く自然と接触できるように配慮することが大切である。

また、自然物を利用するだけでなく、遊びや造形活動で使う草花等を子ども達自身で育てることができたら自然の素晴らしさ、大切さを体を通して理解できると考える。

子ども達は、直接体験が少なくなっている。自然と触れ合い、遊び、自然物を利用していろいろな物を手作りすることは、自然の素晴らしさ、美しさ、楽しさ、厳しさ、不思議さを理解することである。

手を働かすということは、子どもの創造力、創造力、観察力、想像力、集中力を伸ばす要因になる。初めから何々を作るので材料を用意するという取り組みもあれば、自然物の形や色・特性を考え、そこから見立てて何ができるのかを考える取り組みがあってもよい。どちらも手を使って考え、試行錯誤を繰り返し、新しい発見をしていくことを大切にしたい。このような活動は児童の情緒を発達させるのにも大切である。

自然物を利用する時には、以下の2点を大切にしたい。まず、1点目は「必要以上に自然物を取らないこと」である。自然物を利用、活用して自分の学習をするということであるが、その学習以外に自然を大切にし、必要以上に自然物を採集しないことを守りたい。2点目は、「その土地の決まりを守る」ことである。

その地域によっては、自然を守るためにいろいろな注意が示されている。つるを実際に採らなくても、その場所を荒らすようなことがないように指導したい。



(なかにし くにお)

# 思いをひとつに ～キッズゲルニカへの参加を通して～

埼玉県春日部市立春日部中学校 谷 弘美

## 1. はじめに

本校では毎年3月に「3年生を送る会」を行っている。ここ数年、この行事を美術の授業と融合させ、会場のステージ上に2年生全員で共同制作した壁画を発表している。2年前、ピカソの鑑賞授業の教材研究をしている際に「キッズゲルニカ」の存在を知り、本校でも参加しようということで取り組みが始まった。

この「キッズゲルニカ」に参加し、同サイズ(3.5m×7.8m)の巨大なキャンバスにメッセージを表現する経験を通して、生徒は言葉を越えた作品理解への深まりや制作そのものへの達成感が高まっていった。

## 2. キッズゲルニカとは

キッズゲルニカは、世界中のさまざまな地域の子どもたちによってピカソの描いた「ゲルニカ」と同サイズの巨大なキャンバスに、絵を描くという国際的な活動である。

第2次世界大戦終結後から、50年経った1995年

に始まって以来、

世界各地でワー

クショップと展

覧会が開かれ、

数多くの作品が

生まれている。

表現方法はそれ

ぞれの地域で異

なっており、ど

の作品にも平和

への強い願いが

込められている。

(開隆堂教科書『美術2・3下』、平成18年発行より抜粋)



パリで展覧会開催(2006年)

## 3. 絵画に話しかける(授業の実際)

第1学年 「こんにちはピカソ」2時間扱い

①「作者は誰でしょう。」1時間前半

年代別にピカソの自画像の図版を提示しながら、同じ人物の作品だという認識をもたせ、作者の心情や意図、創造的な表現の工夫など見方を深める。

②「この絵に話しかけてみよう1」1時間目後半

少年時代から晩年までの作品図版を提示し、作品をみて感じたことを感性や想像力を働かせて、「どうして～なの?」などと話しかける形でどんどん発表させる。生徒の発表や教師の解説を聞きながら、作品の良さや美しさ、作者の心情や意図、表現の工夫に気づき、時代ごとの創造力の豊かさなどを感じ取り味わう。

③「この絵に話しかけてみよう2」2時間目

前時をふまえて「ゲルニカ」の図版を見ながら、同様に話しかけをしていく。多数の絵を見るのではなくひとつの絵を掘り下げることで、作者と作品の歴史との深い関わりを理解し、「ゲルニカ」の絵を読みとっていく。鑑賞の喜びを味わい、美術を愛好し心豊かな生活を創造していこうとする心情を育成する。

第2学年 「3年生を送る会に向けて壁画を作成しよう」～キッズゲルニカへの参加～に合わせ5時間扱い

①キッズゲルニカ国際委員会代表の金田卓さんを講師に招きオリエンテーションを開き、「キッズゲルニカ」への理解を深めた。講演後には、2年生全員で「たいせつなもの」を歌い、活動のスタートとなった。

②「ゲルニカ」に込められた想いをふまえ、3年生を送る会で制作する壁画に込めるメッセージを考え、テーマを追求する。

③テーマに合わせた壁画の構想(原案)を考える。(2年生全員)

④原案を一つにまとめる。(美術部)

⑤まとめたアイデア(下絵)を、分割しトレースして原寸大になるよう描き込む。(1班・模造紙半分×6班×8クラス+美術部応援 合計60枚)



⑥班ごとに下絵の色合いをみて、トータルカラー全色からイメージに合う色を探す。

⑦トータルカラーをちぎり、点描画の原理で重色・混色しながら貼っていく。



⑧ある程度できたら、他の班の部分と合わせ、繋ぎ目も目立たぬように色合わせをして調整していく。

⑨班長を中心に壮大な作品を目指して制作する。美術部も参加し全体を見て微調整をおこなう。

⑩3年生を送る会を華やかに飾り付け、作品の良い点を鑑賞し合う。

## 4. 作品制作を終えて

「3年生を送る会」では、ステージに掲げられ、さまざまな発表のバックを飾った。その後、卒業式にも掲げられ、現在も体育館に飾られている。

壁画の制作は、各班に模造紙半分の大きさからスタートした。その後、それらを繋ぎ合わせジグソーパズルのピースをはめ込むかのように縦3.5m×横7.8mの大画面に変化していった。大きさ

の変化と共に、生徒たちの心情の変化もみられた。自分たちの心にピタッとくるものが見つかるまで、形や色で会話するようになり、よりよいものを作り上げたいという響き合いが生まれてきたのである。壁画づくりの場を通して、生徒たちは個々の感性や個性を認め合い、仲間と協力して制作することで、「ひとつ」になることの喜びを感じていったようである。

この制作を終えたところで、生徒はゲルニカのピカソと自分を重なり合わせ、その時の心情を体感したように感じた。多くの生徒が、「ゲルニカ」の大きさや絵画がもつパワーに驚き、「実物をぜひ見てみたい。」という感想を持った。自分たちが作り上げた壁画を改めて見ることで、授業で学んだ内容を越えた理解が深まっていったのである。



## 5. 美術教育の持つ力

完成し体育館に飾られた壁画を見たとき、生徒はまず自分のグループが作った場所を探す。そして周囲との色や形の調和を感じ、全体を見渡す。一部が全体のための大切なパーツということを感じ取ることで、自分たちの学年の団結・周囲との一体感へと視点が変化する。この一体感こそ共同制作の持つ醍醐味だと感じた。

このように壁画の作品だけでなく、美術作品制作は、単に授業の作品制作というレベルで考えず、さまざまな指導と結びつけた取り組みとして、生きた教育が追求できるのである。

授業を通してさまざまな活動に参加し、取り組みを広く発信することで、美術の持つ役割が行事の中で発揮され、生き生きと制作する子どもの姿が見られた。(たに ひろみ)

## かけがえのない自分に気付くカウンセリングの 機能を生かした鑑賞の可能性を探る

～若林奮「作品No2」(北九州市立美術館所蔵)～

北九州市立美術館 学芸員 片瀨 富子

### 1. はじめに

私は現在、北九州市立美術館の学芸員であるが、昨年までは市内小学校の教員をしていた。本実践は小学校6年生を対象に美術館の所蔵作品を活用した授業実践である。

### 2. カウンセリングの機能を生かした対話型の鑑賞と表現

作品を鑑賞することは、作品や作家との対話であるとともに自己との対話である。対話型の鑑賞とは、自信がなく、存在感をもてない子どもに「感じるままを言葉にする」「自己の体験や思いを語ることで癒す」などの手法によって、自己を見つめさせることである。一方、心の奥深くにある世界を表現することはその過程において、自分を確信し、内的統合を図り、心の安定を得ることである。

### 3. 若林奮「作品No2」の教材としての価値



▲若林奮「作品No2」北九州市立美術館所蔵

本市美術館のエントランスホール外庭に置かれた巨大な鉄の箱「作品No2」は、ガラス越しにしかその姿を見せない。しかし、見えない空間にもその存在を意識させる不思議な魅力をもっている。巨大な鉄の箱の内側にはどんな世界が広がっているのか、見る者の好奇心と想像を掻き立てる。本作品は、内面を振り返ることに重点をおいた造形作品としての価値が高いと考える。

### 4. 題材名「見える世界と見えない世界」の展開

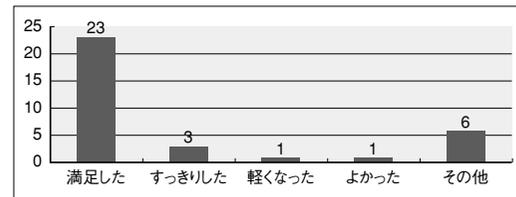
○鑑賞～作品との出会い～

クイズ形式を取り入れたギャラリートークで子どもの知的好奇心を刺激したり、ワークシートに想像したことをメモしたりして、トークすることの抵抗感をなくし、ありのままの自己を出すことができるようにした。トークでは、子どもの想像や考えを受容するとともに、共感しながらトークを進め、子ども同士の対話を楽しむように促した。その過程で子どもは、鉄の箱の外側のドアを潰したような痕跡や窓を思わせるくり貫きなどの「見える世界」から鉄の箱の中の「見えない世界」へと想像を広げていった。

「何を閉じ込めているのか」の問いでは、「悲しみ」「喜び」「恥ずかしさ」など子どもの内面を表す言葉が多数でてきた。

### 5. おわりに

○成果



▲資料「カウンセリング効果」(学習後の調査34名)

資料から、子どもが内面を見つめ、表現を通して心の奥深くにある自分を確信して、癒されていたことがうかがえる。

カウンセリングにもとづく対話形式によるギャラリートークは、多くの発言を促し、共感することで、子どもが自己の内面と対話し、「見える世界」「見えない世界」の想像を広げることができた。

表現の過程では自己の内面を色や形に置きかえながら、自己を表出して、かけがえのない自分に気付くことにつながった。子どもは、閉じ込めたい自己の思いを表現することを通して、心を癒していったものと思われる。(かたふち とみこ)

## 造形ピックアップ

# 子どもの輝きを見つけ合うサークル活動

会津造形サークル「みしらず会」会長 渡部 憲生

### 1. サークル活動について

「みしらず会」は、平成8年に図画工作好きの先生方が集まり、「先輩、後輩、立場を超えて、自分の意見を述べ合うことができる仲間であること」、「厳しい意見も素敵な図画工作の授業を共に創ろうとするための意見として受け留め、大いに議論すること」の二つの願いをもって始めました。

### 2. 実践報告での様子

○実践報告「慧日寺を守ろう」6年生

粘土の板づくりからできた形をもとに発想して表現する題材に、地元の史跡「慧日寺」を守る神様をつくろうというテーマを加えてアレンジして題材化したものです。「粘土を板状にしたり、板からさらに形を変形させて、粘土の自由に變形する面白さを体全体で味わう」、「地元の素材を題材にすることにより、地元の史跡の良さを再認識する」という願いを込めた題材です。

子どもたちは、一人一人、板状の粘土から面白い形をつくり出し、それを生かして思い思いに面

白い守り神を表現することができました。

先生方からは、子どもたちの粘土の形の生かし方の面白さや守り神の表現の多様さを称賛する意見もありましたが、「題材のアレンジというが、テーマが方向付けられたことにより子どもたちの表現の幅が狭められたのではないか」という意見も出され、その後、題材づくりのポイントや課題について意見が交わされました。

### 3. 新たな活動への発展

このように活動では、毎回気軽な意見交換がなされ大変勉強になっていますが、他の学校の先生方には難しい会で参加しにくいイメージがあるようです。そこで今後は、現場の先生方が日頃困っていることをベースに実技研修の場を設定しながら造形教育の輪を広げていきたいと考えています。

また、福島県では、年に2回、県内4地区のサークルが集まって県造形サークル大会も実施しています。その様子を地区に広報していく活動もさらに盛んにしていきたいと思っています。

(わたなべ のりお)

#### 第77回 埼玉大学教育学部附属小学校 教育研究協議会

図画工作科研究テーマ：「表現と鑑賞が関連して働く指導と評価の工夫」

会期：平成21年10月13日(火) 受付12:30～

お問い合わせ：TEL 048-833-6291(伊藤秀一、加賀屋徳之)

#### 第62回 全国造形教育研究大会 千葉大会

#### 第49回 関東甲信越静地区造形教育研究大会 千葉大会

#### 第60回 千葉県造形教育研究発表大会

大会テーマ：「きらめく感性 ときめく思い うみだせアート」

会期：平成21年11月26日(木)・27日(金) 受付9:00～

場所：26日…千葉県教育会館

27日…千葉市立幕張南小学校、幕張中学校、磯辺百合幼稚園、幕張小学校、

磯辺第四小学校、千葉県立幕張総合高等学校 他

お問い合わせ：TEL 043-251-7295(千葉市立弥生小学校 小高玄一)